SHOW-HEY シネマルーム

★★★★★

JFK／新証言
知られざる陰謀【劇場版】

2021 年／アメリカ映画
配給：STAR CHANNEL MOVIES／118 分

2023（令和 5）年 11 月 23 日鑑賞　シネ・リーブル梅田

Data　２０２３－１３７

監督：オリヴァー・ストーン
脚本：ジェームズ・ディユジニオ
出演：オリヴァー・ストーン
ナレーション：ウーピー・ゴールドバーグ／ドナルド・サザーランド

みどころ

中学 3 年生の私が聞いたケネディ暗殺から 60 年。時が経つのは早いものだが、愛光中学に入学した直後に田中校長から聞いた、米国における若く優秀なリーダー誕生の講話を、私は今でもはっきり覚えているからすごい。1967 年に大学に入学した直後は、学生運動の中で「ケネディとアメリカ帝国主義」の学習にも励んだが、その当否は・・・？

ケネディ暗殺はオズワルドの単独犯！そんなバカな！それがオリヴァー・ストーン監督の立場だ。『JFK』（91 年）以降に明らかにされた膨大な資料を駆使した映像は、迫力満点、そして説得力十分。CIA 何するものぞ！「ウォーレン委員会報告」（64 年）何するものぞ！そんな意気込みは、邦題の『新証言、知られざる陰謀』というサブタイトルを見ても明らかだ。

オバマは理想主義を唱えるだけだったが、ケネディは違う！もし、あの暗殺がなかったら、ベトナム戦争の拡大はなかったのでは？それを考えることは「クレオパトラの鼻が・・・」と同じく無意味？いやいや、そんなことはないはずだ。

――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――＊――

■□■この監督の名作の数々に注目！本作も必見！■□■

本作はオリヴァー・ストーン監督が 1991 年に発表した『JFK』以降の、新たに解禁された何百万ページにも及ぶ機密解除文書の中から、“真実”と思われる重要な発見を白日の下に晒すとともに、主要メディアが無視し続けてきた陰謀の真相をあぶり出したドキュメンタリー映画だ。本作のパンフレットには、斉藤博昭氏（映画ジャーナリスト）の COLUMN「“反アメリカ”の作品も送り出し続ける、稀有な映画作家オリヴァー・ストーン」があり、その冒頭、「社会を正しい方向に動かそうとする映画作家か、それとも、陰謀論も含めて大

風呂敷を広げるお騒がせ監督か――。」と問題提起した上、「オリヴァー・ストーンは、つねにこうした論調とともに語られてきた人だ。ただ、ひとつだけ確実なのは、彼がつねにアメリカ政府、アメリカが作り上げてきた近代史に批判的である、ということ。」と結論付けている。それが斉藤氏の独断と偏見による結論でないことは、『JFK』だけでなく、アカデミー作品賞と監督賞を受賞した『プラトーン』(86 年) をはじめ、『ウォール街』(87 年)、『7 月 4 日に生まれて』(89 年) 等を観れば明らかだ。そんなオリヴァー・ストーン監督の過去の名作の数々を思い出しても、本作は必見！

『JFK』(91 年) は第 64 回アカデミー賞で撮影賞と編集賞を受賞したが、同監督はそれから 28 年間も「ずっとケネディとケネディ暗殺事件の真相」を追っていたわけだ。そして、暗殺事件の発生は 1963 年 11 月 22 日のことだから、今年は 60 周年の節目の年だ。そのため、ケネディの暗殺 60 周年に絡めて本作の紹介をする新聞記事もチラホラと・・・。

■□■ケネディ大統領の登場に、中学生の私も大感激！■□■

1949 年 1 月 26 日生まれの私は、1961 年 4 月に松山市内の愛光学園中学部に入学した。同校は、スペインで発足したカトリックのドミニコ会により、「愛 (Amor) と光 (Lumen) の使徒」たる「世界的教養人」の育成を目指して 1953 (昭和 28) 年に設立された。1 歳年上の兄はその 8 期生、私はその 9 期生だ。1961 年 4 月に入学した私たちに田中忠夫校長が熱く語ったのが、遠いアメリカの国で 1961 年 1 月にケネディ大統領が登場したこと。ケネディ一家が敬虔なカトリック教徒であったこともあるが、それ以上に田中校長が中学生になったばかりの私たちに熱く語りたかったのは、ケネディ大統領の “禁欲主義的” で “理想主義的” な生き方だった。60 年たった今でも、私はケネディ大統領の生き方と彼が掲げる理想について熱く語る田中校長の姿や言葉をはっきり覚えている。教育とは何ともすごいものだ。

■□■大学時代は「ケネディとアメリカ帝国主義」を学習！■□■

私が大学に入学したのは、1967 年 4 月。入学と同時に学生運動にハマった私は、大学内の諸問題のほか、政治的課題として「ベトナム戦争反対」の運動にも参加することになった。法学部の授業には全く出席せず、学生運動の中で私が学んだのは、マルクス・レーニン主義の文献だった。そして、その一環として学習したのが「ケネディとアメリカ帝国主義」と題する文献だ。1969 年 1 月には東大の安田講堂事件が勃発したが、その時期のベトナム戦争は、既にアメリカの敗色が濃くなっていた。学生運動にのめり込んだ当初は、1963 年に暗殺死したケネディの後を継いだジョンソン大統領の指導の下で、空爆 (北爆) を激化させたが、ホーチミン率いる北ベトナムはそれに屈することなく、ゲリラ戦による抵抗を続けていた。したがって、私はベトナム戦争を推進しているのはジョンソン大統領だと思っていたが、「ケネディとアメリカ帝国主義」によれば、その根源はケネディ大統領の帝国主義的考え方にあると言いたかったらしい。そんな文献を読んでいた当時の私は「それもありかナァ」と考えて (洗脳されて？) いた。しかし、実はそうではないことが本作を

観て、私にはハッキリ分かった。

もし、ケネディ大統領が暗殺されていなかったら、ベトナム戦争であれほど大規模な北爆が長期間にわたって続くことはなかったし、ベトナムもアメリカも互いに大きな被害を出しながら、結局アメリカの敗北という形で終わることもなかったのでは？それは、「もしクレオパトラの鼻がもう少し低かったら・・・？」と同じ“歴史上の if”だが、それを考えることは無意味ではないはずだ。逆にそのことは、「もし 2022 年、安倍晋三元首相が銃撃死していなければ・・・？」と共に、しっかり考えるべきことだと私は思っている。

■□■単独説 vs 陰謀説。暗殺から 60 年、監督の追及の手は?■□■

ケネディ大統領の暗殺を巡っては、オズワルド容疑者の単独犯説と、陰謀説の対立がある。後者は、平和の使者のような若き指導者ケネディの登場を恐れた CIA（中央情報局）等による陰謀だとするもので、オリヴァー・ストーン監督はその立場だ。『JFK』（91 年）ではケビン・コスナー扮する地方検事が、暗殺事件の陰に潜む CIA 等の存在を次々と暴いていた。

アメリカは民主主義国だから、表現の自由、報道の自由はギリギリまで保障されているが、国家にはどうしても外交・軍事面等の機密が存在する。そのため、文書の公開にも一定の制限が設けられているのは仕方ない。ケネディ暗殺を巡っては、暗殺直後に政府が設置したウォーレン委員会が、事件翌年の 1964 年に「オズワルド容疑者の単独犯」と結論付ける「ウォーレン委員会報告」をまとめている。しかし、オリヴァー・ストーン監督の立場は、陰謀説だ。本作については、細見卓司氏の新聞批評があり、そこでは次の通り書かれている。「暗殺から 50 年の 2013 年、メディアの報道はウォーレン委員会のプロパガンダそのものだった。表面的な報道姿勢に、気が狂いそうになった。映画は確かにインパクトを与えられるが、ディテールというのは人は忘れてしまうものだ。だから、ジャーナリズムは政治に影響を与えられるからこそ、真実とは何かを繰り返し報道しなくてはいけない。」さらに、「大統領の命を奪った銃弾、オズワルド容疑者の逃走経路、病院での検視などを細かく再検証。法科学や弾道学など様々な専門家にインタビューし、公開文書や事件当時に現場にいた目撃者の証言などから、ウォーレン委員会の矛盾を浮き彫りにする。圧倒的な情報量と論理的な構成で説得力を増していくさまは圧巻。」と書かれている。次から次へと繰り出される本作の新資料とその解説を聞いていると、まさに本作はオリヴァー・ストーン監督の「調査報道」だ。

最後に細見氏は「ケネディはソ連との冷戦を含めて、純粋に変化を望んでいた。もし 2 期目に当選していたら、きっと達成していただろう。ベトナム戦争は彼の死後、すぐに悪化した。ケネディは最後の正直な大統領だった」と結んでいるが、私も全く同感だ。暗殺から 60 年間ずっと執念を燃やし続け、こんな素晴らしいドキュメンタリー映画を完成させた。オリヴァー・ストーン監督に拍手！

2023（令和 5）年 11 月 29 日記